

学校教育目標	自らを律し、自ら行動する人間の育成 ～ 自律と自立 ～	経営理念	「育ち直し」「学び直し」の理念のもと、児童生徒の自律・自立を支援する。 ～ この学校で学んでよかったと思える学校づくり ～ 『生きる力』『自己指導能力』『学ぶ力』の育成・生徒指導の実践上の4つの視点に留意した生徒指導と学習指導の推進
--------	--------------------------------	------	--

評価計画					自己評価				学校関係者評価		改善方針			
項目	重点	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目	目標値	達成値		達成度	評価	結果と課題の分析	評価	コメント	改善方針
							7月	12月						
学習指導	1	確かな学力の定着	わかる授業づくりの推進【共感的な人間関係の育成】 【自己存在の感受】	・UDを取り入れた授業(焦点化・視覚化・共有化・振り返りの工夫・ICTの活用)の徹底 ・児童生徒一人一人の実態に応じた個別最適な学びの推進	・児童生徒の意識調査「この教科の授業はよくわかります」の肯定的評価の割合 ・児童生徒の意識調査「授業は、自分に合った内容、教え方などになっていた」の肯定的評価の割合	90%以上 90%以上	89% 94%	87% 89%	96.7% 98.9%	3	校内での研究授業や生徒情報の共有を通して、効果的な支援の共通理解を進めることができた。意識調査では目標数値には届いていないものの、一人一人の状態や学力に応じた声掛けを行うことで、既習単元を積み重ねる時期であっても、大半の生徒が「わかった」と実感できている。また、自己肯定感の向上も見られる。今後は、これらの実態をより的確に把握し、支援できるよう、さらなる手立てを工夫していきたい。	B	授業理解の数値が微減した点について、「これまで学習してなかったり、できなかったことがわかってきたからこそ、自分のわからぬ部分が明確になったのではないか」とのこと。また、学習が苦手な生徒に対し、できないことを否定せず、教員がどのような言葉をかけるかが重要である。	研究授業や生徒情報の共有を継続し、効果的な支援の共通理解を深めることが必要である。生徒一人一人の状態に応じた細やかな声掛けを徹底し、実態を的確に把握するための手立てをさらに工夫する。
			自主的・主体的な学習態度の育成 【自己決定の場の提供】	・授業に自己決定の場を設け、主体的に学ぶ児童生徒を育成 ・自分の考えを持ち、共有化により自己の考えを広げ深め、発表する場の設定 ・寮学習での学力向上のための取組内容の明確化	・「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していた」の肯定的評価の割合 ・児童生徒の意識調査「学校で宿題が出されたら忘れずにしています」の肯定的評価の割合	90%以上 85%以上	82% 87%	88% 93%	97.8% 109.4%	4	授業では、自己決定の機会を意図的に設定し、発表内容への問い返しや課題解の形式を工夫することで、生徒が自らの意思で学習に向かう姿を育成することができた。大多数の生徒は「分かりません」と率直に伝え、理解のための考え方を率直に学ぼうとする姿勢が見られた。一方で、一部の生徒にはその姿勢が十分に育っていない様子も認められるため、生徒指導部と連携しつつ、引き続き基礎的な学習態度の形成を丁寧に支援していく必要がある。	A	日常の些細なことでも、指示待ちにするのではなく「どうしたらいいか」を生徒に考えさせる「自己決定の場」を意識的に作っている姿勢がよい。その場を増やしていくことを期待する。	意図的な「自己決定の機会」の設定や、問い返し、解答形式の工夫により、生徒が自らの意思で学習に向かう姿を育成できるように努める。基礎的な学習態度が未定着な生徒に対しては、学園・担任・生徒指導部と連携して丁寧な支援を行う。
生徒指導	2	社会に通用する生徒の育成	生徒理解に基づく指導の充実【共感的な人間関係の育成】 【自己決定の場の提供】	・学園との連携による人間関係能力向上に係る指導の充実 ・コグトレを計画的に継続して実施 ・合意形成に基づく生徒指導の推進 ・体験活動の充実 ・「人としての生き方」を深化させる道徳教育の充実 ・個々に応じたキャリア教育の充実	・児童生徒の意識調査で「自分にも他人にも良い行動を考え行っている」の肯定的評価の割合 ・児童生徒の意識調査「東広島スタンダード」に係る項目(あいさつ、返事、言葉づかい、履き物をそろえる)の肯定的評価の割合	90%以上 90%以上	100% 95.5%	97.2% 94.7%	108% 105.2%	4	入所前の生活と比較し、枠がある生活の中で大人へも子どもへも正しく関わらないといけないため、肯定的評価が高くなっていると考えられる。「せざるを得ないから」「自ら進んで行う」にするために、いつでも、どこでも、だれにでも、正しい行動を日々の生活で定着させていくことが課題である。 あいさつは大人から積極的に行うことでできている。返事や言葉づかいにはまだ課題があると感じられる。全体的に大人からの声掛けが必要であるが、生徒の自己評価は肯定的なものが多い。実態と自己評価の乖離が感じられ生徒が主体的に行動するための指導方法を考えたい必要がある。	A	「東広島スタンダード(挨拶・返事・履物を揃える等)」について、最初は強制であっても習慣化させることは重要であり、最終的には生徒がその必要性に自ら気づくプロセスが大切である。また、導入されている「コグトレ(認知機能強化トレーニング)」については、単なる作業にせず、個々の支援ニーズに結びつける必要がある。	「せざるを得ないから行う」状態から「自ら進んで行う」状態へ移行させるため、正しい行動を日々の生活で定着させる工夫する。実態と自己評価の乖離を埋めるため、主体的行動を促す指導方法を検討するとともに、客観的な評価ができる方法を模索していく。
			部活動の充実【自己存在の感受】	・全職員で見守る指導 ・広島学園との連携による協働的な指導	・児童生徒の意識調査「部活動では達成感があつた」の肯定的評価の割合 ・平日の部活動への複数の教員参加率	90%以上 90%以上	100% 100%	100% 100%	111.1% 111.1%	4	参加した教職員が生徒とともに活動したり、積極的に声をかけたりしていることが生徒の活動への達成感につながっていると考えられる。 各曜日の部活動主担当者を割り振ることで全員で取り組むとともに、学園職員と協力し複数体制で指導することができている。課題としては「役割だから参加する」ではなく、主体的に指導にかかわる姿勢が必要である。	A	マラソン大会等での成果や、学校と広島学園の職員が共同で指導にあたっている手厚い体制は効果的である。これからも連携を深めていってほしい。	教職員が「役割だから参加する」のではなく、主体的に指導に関わる姿勢を重視していく。引き続き学園職員と協力し、複数体制での指導を継続していく。
信頼される学校	3	関係機関から信頼される教育活動の充実	広島学園職員から信頼される教育活動の推進	・一人一人の課題やニーズに応じた教育活動の充実 ・原籍校連絡協議会、懇談会の充実 ・原籍校、広島学園、学校による進路実現に向けた取組の充実	・学園職員の意識調査「学校職員は個の実態に応じた適切な課題を提示している」の肯定的評価の割合 ・学園職員の意識調査「学校職員は児童生徒の発達を理解して指導している」の肯定的評価の割合	90%以上 90%以上	77.3% 81.8%	87% 100%	96.7% 111.1%	4	「生徒の発達を理解して指導している」に対する肯定的評価は極めて高い一方、個別最適な課題の提示は目標にあと一歩届かなかった。しかし、前期より肯定的割合が増えていることから、対策が功を奏していると考えられる。 原籍校・広島学園・本校の三者での連絡協議・懇談会の記録様式の統一を行ったことや、寮職員との細かな連携を行いながら指導に取り組んだことで、評価が上がりつつある。今後は、自立支援計画をもとにした個別の目標から授業課題を見出し、評価のトレーサビリティを強化して、根拠とプロセスが見える形で共有していきたい。	A	寮の先生(学園職員)との連携が進み、数値が向上したことは素晴らしい。卒業後の自立を見据え、地域社会へ戻った際にも通用する「事実に基づいた自立」を支援してほしい。	自立支援計画に基づいた個別の目標と、日々の授業課題のつながりを可視化する。評価のトレーサビリティ(道跡可能性)を強化し、根拠とプロセスが見える形で情報共有していく。
業務改善や働き方	4	効果的な教育活動の充実	みんなが幸せになる「働き方改革」の推進	・業務の役割分担の見直しと適正化 ・「やりがい」を感じる教育実践の充実 ・教職員が意見を言いやすい組織風土の醸成	・勤務時間外の在校時間が月45時間・年間360時間未満の割合 ・教職員アンケート「子供と向き合う時間(授業準備等を含む)が確保できている」の肯定的評価の割合	95%以上 95%以上	100% 94.1%	100% 95%	105.3% 100.0%	4	アンケートのお結果は良好である。一方で、年度初めや年度末などは一時的な逼迫が学習準備時間の質に影響するリスクもあると考え、引き続き適正化に取り組む。 役割分担の適正化を継続し、「やらないことリスト」や定型業務の標準化・自動化(テンプレート化・共有フォルダ運用)を推進する。次年度は意見を言いやすい組織風土を支えるために、各学期2回、短時間・少人数などでの定例の振り返りなども取り入れていきたい。	A	働き方改革は単なる時間の削減だけでなく、教員の「やりがい」や「達成感」といった内面的な充実が重要である。AI活用などによる効率化を、生徒と向き合う時間の確保につなげる姿勢がよい。	引き続き、「やらないことリスト」の運用や定型業務の標準化・自動化を行うとともに、業務の推進、業務の適正化を図る。次年度は、意見を言いやすい組織風土を醸成するため、学期に2回程度の短時間・少人数での定例の振り返りを取り入れる。

※目標の精選と重点化を行い、重点の項に「1」「2」「3」で表示する。

■自己評価

4...目標を上回って達成 3...目標どおりに達成
2...目標をやや下回って達成 1...目標をかなり下回って達

■学校関係者評価

A...とても適切である B...概ね適切である
C...あまり適切でない D...全く適切でない